

弥生時代を再考する ③ 登呂遺跡の平成と昭和

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

登呂遺跡と日本考古学協会

2018年10月、日本最大の考古学の学会、日本考古学協会の年次大会が静岡大学で開催され、弥生時代を代表する集落遺跡のひとつ、登呂遺跡を久しぶりに訪れた。登呂遺跡といえば、



写真1 現在の登呂遺跡

今から約70年前の戦後まもない時期に、学界をあげた発掘調査が行われ、歴史を塗り替えた、いわば、日本

考古学の「聖地」と言ってよい。登呂遺跡の公園は、JR静岡駅の南口からバスで約10分の閑静な市街地の一面にあり、緑化されて落ち着いたたたずまいの空間内に、復元された竪穴建物や掘立柱倉庫、水田などが配置され、背後には静岡市立の登呂博物館が建っている。その向こう側には、東西の交通の大動脈、東名高速道路の高架が間近に見える。折しも博物館では、「平成×登呂」と題した企画展が開催中で、平成の時代に行われた遺跡の再発掘調査と再整備、出土資料の重要文化財指定、博物館のリニューアルなどの出来事が、写真や関連資料を通して回顧されていた。現在の遺跡公園の姿も、博物館の展示内容も、「平成」の時代に新しく装いを変えたものなのだ。

博物館の展示がアピールするように、登呂遺跡の発見と戦後復興期の発掘調査、その後に続く遺跡整備は、「昭和史」の重要な一コマと言ってよい。遺跡が発見されたのは、戦争さなかの昭和18年(1943年)、軍需工場の建設がきっかけだった。遺跡の北辺が工場敷地となり、その土取りの最中に住居跡や水田の畦畔と見られる杭列が発見され、奈良県の唐古遺跡に匹敵する大発見として『毎日新聞』が報じた。このことで注目が集まり、静岡県による小規模な発掘と測量調査が行われた。唐古遺跡の発掘調査では、木製農耕具や稲粃などの出土資料によって稲作農耕文化の実態が明らかになったものの、住居跡や水田跡などは確認されていなかった。

戦後になり、遺跡の重要性を認めた学者が結集し、考古学・地理学・地質学・建築史学などの分野の専門家が加わった「登呂遺跡調査会」を組織して、昭和22年(1947年)の夏、約50日にわたる本格的な発掘調査を実施した。昭和23年(1948年)、この調査を契機として新たに設立された日本考古学協会内に、特別委員会として調査会が再組織され、科学研究費の交付を受けて、昭和23年(1948年)～25年(1950年)までの3年間、大規模な発掘調査が進められた。その結果、集落を構成する建物跡や水田跡などの遺構がはじめてセットで発見され、ムラの全容が明らかになった。このことは、新しい時代の象徴となる出来事だった。皇国史観を脱却し、考古学の視点で描かれた歴史が、一躍、表舞台に登場することになった。登呂遺跡の発掘調査によって明らかになった「稲作農耕が始まり、平和で明るい時代」という弥生時代のイメージが、敗戦直後の

国民に何かしらの希望を与えたのだ。矢板が並ぶ水田畦畔など、歴史教科書に掲載された登呂遺跡の写真が記憶に残っている人は多いと思う。昭和27年(1952年)、遺跡地は国の特別史跡に指定された。そして、発掘調査の報告書は日本考古学協会の編集

で昭和29年(1954年)に刊行された。報告書の写真を見ると、今とは違って遺跡の周辺は一面の田園風景で、その後の変化の激しさが印象的だ。



写真2 発掘終了直後の登呂遺跡

考古学者の戦死

さて、設立70周年を記念する日本考古学協会の2018年大会が静岡の地で開催されたのは、上記のような経緯による。大会の記念講演のひとつ、設楽博己氏(東京大学教授)による「弥生文化地域研究の黎明—江藤千鶴樹の人と学問—」は、登呂遺跡の発見・発掘と重なる時代の忘れられた歴史を掘り起こし、思い起こさせてくれる内容だった。江藤千鶴樹という人は、一般にはあまり知られていないが、戦前に、藤森栄一氏に導かれながら、森本六爾氏の主宰する東京考古学会の同人として活躍した考古学者で、藤森氏のエッセイ「考古学者の戦死」(『かもしかみち』、1967年)の主人公の一人だ。藤森氏と設楽氏によると、江藤氏が考古学の世界で活躍したのは、昭和10年(1935年)～15年(1940年)までの6年間に過ぎなかった。それは29歳の若さで沖縄戦で戦死したからだが、その短い期間に長短合わせて20編の論文を発表したという。弥生文化に関しては、とくに、駿河・伊豆の弥生土器、弥生文化の漁労活動をテーマに研究を進めた。

アメリカのワシントン州で移民の長男として生まれた江藤氏は、アメリカの市民権とダビデ・江藤チマキのクリスチャン・ネームも持っていたが、7歳の時に、日本の学校に入るために故郷の沼津に戻る。そして父の実家の裏畑で見つけた土器片から考古学に興味を持ち、國學院大學に進んで、本格的な研究活動を始める。藤森氏と江藤氏が知遇を得たのは森本六爾氏の病没後、昭和12年(1937年)、東京考古学会が拠点を大阪に移してからのことだった。唐古遺跡の発掘調査もすでに終了していたが、唐古国民学校で出土遺物の整理をしていた小林行雄氏の指導を受けたという。その後、昭和15年(1940年)には教師として沼津に戻り、考古学の世界から遠ざかっていたが、やがて召集され、昭和20年(1945年)6月20日、沖縄の摩文仁の地で二人の部下とともに切り込み隊の長として姿を消した。設楽氏の講演では、最後に、沖縄の平和祈念公園の「平和の礎」に刻まれた多数の戦没者名が映し出されたのだが、その中には江藤千鶴樹の名前が確かに含まれていた。